

A 語句の意味と読み

- (1) 趣がある。心がひかれる。／現代語の「おかしい（滑稽だ）」ではない。プラスの評価語
- (2) しみじみと心を打たれる。感慨深い。／「をかし」が明るく知的に「おもしろい」のに対し、「あはれ」はしみじみと胸に迫る感動。二語セットで問われやすい
- (3) 歩き回る。／「まかり」はへりくだった言い方を作る語。繁樹が自分の行動を語っているところ（「一京」＝都じゅう）
- (4) （木の姿が）美しい。見事だ。／★古文の「うつくし」は「かわいらしい・いとしい」が基本の意味。ここは木の姿（様体＝姿かたち）を言っているので「美しい」でよい
- (5) 読み＝ちよく（歴史的仮名遣いでは「ちよく」）／意味＝天皇の命令。みことのり。／「勅命」の「勅」。帝じきじきのお言いつけなので、断ることができない
- (6) 不思議だ。変だ。／★「あやし」には「身分が低い・粗末だ」の意もある。ここは思いがけない歌が結ばれていたので「不思議だ」
- (7) きまり悪く思っていたらしまった。ばつが悪そうにしてしまった。／「あまえ」はヤ行下二段動詞「あまゆ（甘ゆ）」の連用形で、「きまり悪く思う・恥ずかしがる」の意。「おはします」は「あり・をり」の尊敬語

B 文法

- (8) 過去の助動詞「き」の連体形。下の体言「こと」にかかっているから。／★「き」は自分が直接経験した過去。繁樹が自分の体験を語る話なので「き（し・しか）」が何度も出てくる
- (9) ①尊敬の助動詞「さす」＋尊敬の補助動詞「給ふ」が重なった二重尊敬（最高敬語）で「お求めになった」と訳す説。②「さす」を使役ととり「（人に）お求めさせになった」と訳す説。どちらでもよいので、お使いの教科書の説明に合わせることに。／帝が自分で探すわけではなく人に探させている場面なので、どちらの読みも成り立つ。敬意の対象が村上天皇である点は同じ
- (10) 「え」は下に打消の語を伴って不可能（～できない）を表す副詞。「じ」は打消推量の助動詞（～ないだろう）。あわせて「見分けられないだろう」の意。／★「え～ず／え～じ／え～まじ」で不可能。「え」だけ見て「得」と取りちがえない
- (11) 「あらめ」を補って「あるやうこそはあらめ」となる。ラ変動詞「あり」の未然形「あら」＋推量の助動詞「む」の已然形「め」。意味は「何かわけがあるのだろう」。／★「こそ」の結びは已然形。結びを言わずに余情を残すのが「結びの省略」
- (12) 四段動詞「問ふ」の未然形「問は」＋接続助詞「ば」。未然形＋「ば」なので順接の仮定条件で、「もし尋ねたならば」の意。／★已然形＋「ば」なら確定条件（～ので）。未然形か已然形かで訳が変わる。なお「いかが」は疑問の副詞で、結びの「答へむ」は連体形。ここは「答えようがない」という反語的な気持ちがある

(13) 打消当然（～てはならない）／連体形。教科書によっては「禁止（～てはならない）」「不適當（～ないほうがよい）」と呼ぶこともあるので、お使いの教科書の呼び方に合わせることに。いずれにせよ「あるはずがない」（打消推量）ではない。／「べし」の打消にあたる助動詞。下の体言「こと」にかかるので連体形「まじき」

C 主語・指す内容・敬意の方向

- (14) 丁寧語（丁寧の補助動詞）。この話の語り手である夏山繁樹から、話の聞き手への敬意。／★地の文の丁寧語は「語り手→聞き手」。尊敬・謙譲とまちがえない
- (15) 謙譲語（「受く・聞く」の謙譲語）。語り手の繁樹から、ご命令を下した帝（村上天皇）への敬意。承ったのは「なにがし主」（蔵人であった人物）。／謙譲語は動作を受ける側を高める。ここで命令を下したのは帝なので、敬意は帝に向かう
- (16) 「手」＝筆跡。「女の手」で女性の筆跡の意。その女は「貫之のぬしの御むすめ」（紀貫之の娘）。／★「手」＝筆跡・書きぶり。後で帝が家を尋ねさせて、その正体がわかる
- (17) 尊敬語（「思ふ」の尊敬語）。語り手の繁樹から、お思いになった帝（村上天皇）への敬意。／尊敬語は動作をする側を高める。歌を見て不思議に思ったのは帝なので、敬意は帝に向かう
- (18) 村上天皇（天暦の御時の帝）。／「おはします」は「あり・をり」の尊敬語。歌を見てきまり悪く思っているのは、直前で「遺恨のわざを…」と言った帝なので主語は帝。ただし本文には「いますがり」「のたまふ」（なにがし主への尊敬）、「言はせ給ひ」（家あるじへの尊敬）もあるので、「尊敬語＝帝」と機械的に決めないこと

D 口語訳

- (19) 清涼殿の御前の梅の木が枯れてしまったので、（帝が代わりの梅を）お求めになったところ（＝お求めになった時に）。
（③を使役ととって「（人に）お求めさせになったところ」と訳してもよい。B群③参照）／「しか」は過去「き」の已然形で、已然形＋「ば」は順接確定（～ので）。文末の「に」は接続助詞の単純接続で「～したところ・～した時に」。逆接ではない
- (20) 「若い者たちは（よい梅を）見分けられないだろう。おまえが探せ。」とおっしゃったので、都じゅうを歩き回りましたが、（よい梅は）ございませんでしたが。／「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語。「しかども」は已然形＋「ども」で逆接（～けれども）
- (21) 帝のご命令なのでまことに恐れ多いことです（からお受けします）。けれども、鶯が「私の宿はどこか」と尋ねたならば、私はどう答えたらよいのでしょうか。／「かしこし」＝恐れ多い。前半で承知しつつ、後半で「困ります」とやわらかく訴える組み立て
- (22) 「残念なことをしてしまったなあ。」とおっしゃって、きまり悪そうにしていたらしまった。／「かな」は詠嘆の終助詞で「～なあ」。主語はどちらも帝

E 内容・記述

(23) 鶯が毎年やって来る大切な梅の木を、勅命という力で持ち主から取り上げてしまったこと。しかもその家は歌人紀貫之の娘の住まいであり、和歌によってその心を知って、風流を求めたはずの行いがかえって無粋であったと気づいたから。／「あやしく思し召して」→「何者の家ぞ」→「貫之のぬしの御むすめ」と分かる流れが、そのまま答えの道すじになる

(24) 「あつてはならないことである」として、掘り取ってきた梅の木をすべてもとの家にお返し申し上げた。／★答えの中心は「帝が自分の非を認めて返した」こと。本文の「皆かへし奉りて」が根拠

(25) 勅命という権力で人の大切なものを一方的に奪うことの無粋さと、それをやわらかく、しかし鋭く訴えた和歌の力。帝は歌にこめられた心を読み取って自分のあやまちを認め、梅を返した。和歌の教養を解し、非を改める帝の姿をたたえる話になっている。／★「和歌の力」と「帝が非を認めたこと」の二本立てで書く。どちらか一方だけだと減点されやすい

F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 平安時代後期に成立した作者未詳の歴史物語。藤原道長を中心とする宮廷の歴史を、人物ごとに描く紀伝体でつづる。大宅世継・夏山繁樹という長寿の老人が昔語りをする形をとる。／②の「侍り」が丁寧語なのは、この「老人が聞き手に語る」という形のため。四鏡（大鏡・今鏡・水鏡・増鏡）の最初の作品

(27) 紀貫之の娘（紀内侍とされる）。父の紀貫之は『古今和歌集』の撰者の一人で、『土佐日記』の作者としても知られる代表的な歌人。／本文では「貫之のぬしの御むすめ」とだけ言う。父ゆずりの歌の才を見せるところが読みどころ

(28) 和歌にある「鶯の宿」（＝鶯が毎年やって来て宿とする梅の木）にちなみ、この梅の木が「鶯宿梅」＝鶯が宿る梅と呼び伝えられたから。／「宿」の一語に、鶯のすみか（＝梅の木）と自分の住む家の両方が重ねられている。この重ね方をどう呼ぶかは、お使いの教科書の説明に合わせる

【現代語訳（全文）】

たいそう趣深く、しみじみと心を打たれましたことは、この村上天皇の御代（天暦の御時）に、清涼殿の御前の梅の木が枯れてしまったので、（帝が代わりの梅を）お求めになったときに、なにがし殿が蔵人でいらっしゃった時に、（そのご命令を）承って、（私に）「若い者たちは（よい梅を）見分けられないだろう。おまえが探せ。」とおっしゃったので、都じゅうを歩き回りましたが、

西の京のどこそこという家に、色濃く咲いている木で、姿かたちの美しいのがございましたのを、掘り取りましたところ、その家の主人が、「木にこれ（＝この手紙）を結びつけて持って参上せよ。」と（使いの者に）言わせなされたので、何かわけがあるのだらうと思って、（その木を宮中に）持って参上してひかえておりましたところ、（帝が）「これは何だ。」とおっしゃって御覧になったところ、女の筆跡で書いてございました。

（帝の）ご命令ですのでまことに恐れ多いことです。けれども、（毎年やって来る）鶯が「私の宿はどこか」と尋ねたならば、私はどう答えたらよいのでしょうか。

と（書いて）あったので、（帝は）不思議に思いになって、「これは誰の家か。」とお尋ねになったところ、（あの）紀貫之殿の娘御が住んでいる所であった。（帝は）「残念なことをしてしまったなあ。」とおっしゃって、きまり悪そうにしていらっしゃった。この繁樹の一生の恥は、これでございましたでしょうか。そうはこのものの、（帝は）「あつてはならないことである。」とおっしゃって、（掘り取ってきた木を）すべてお返し申し上げて、その家は陽成院の斎院に差し上げられたのだった、ということだ。